

イチイを育てる

～一位一刀彫を継承するために～

伝統的工芸品・一位一刀彫



一位一刀彫のふくろう

しらた（辺材）とあかた（心材）の色差をうまく利用している

一位一刀彫は、飛騨地域で製造される国指定の伝統的工芸品です。県木イチイを使う点、「飛騨の匠」の技の結晶である点から、**一位一刀彫は、私たち岐阜県民の宝もの**であり、アイデンティティのよりどころであるといえます。

しかし、天然資源が枯渇していることから、近年、イチイ原木の入手が大変困難になっています。一位一刀彫には、イチイの木が不可欠であり、一位一刀彫を継承するためには、イチイを人工的に育てる技術の開発が必要です。

イチイを育てるには、発想の転換が必要

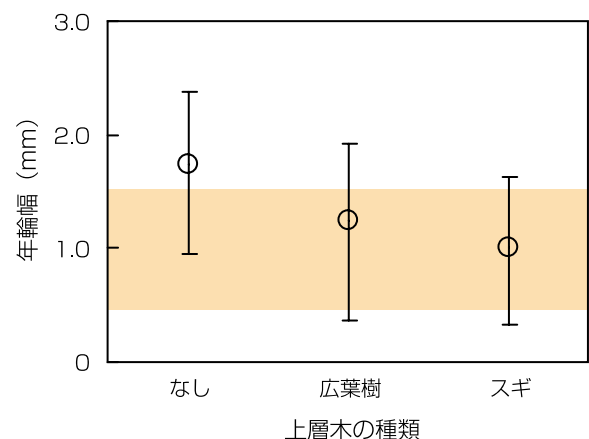
イチイは、今までほとんど造林されてきませんでした。なぜなら、イチイはとても成長が遅く、収穫までに相当な年月が必要で、造林樹種として不向きだったからです。しかも、一位一刀彫の材料は「年輪幅1mm以下、直径30cm以上の通直・無節材」です。この場合、収穫するまでに短くても150年かかります。

森林研究所では、**一位一刀彫の原木生産に適したイチイ人工林の管理方法**を検討するため、岐阜県内にある数少ないイチイ人工林を調査しています。

（1）約40年生の林分（高山市久々野町）

イチイの単層林（上層木なし）、落葉広葉樹との混交林、同齡スギとの複層林を調べました。

その結果、単層林のイチイは、直径成長が良好で、目標には最も早く到達しますが、年輪幅が大きいいため、原木には向いていないと考えられます。一方、混交林や複層林では、落葉広葉樹の樹冠との競争やスギの被圧によって、イチイの成長が抑制され、木目の詰まった良質な材を収穫できる可能性があります。



上層木が異なるイチイ林分の年輪幅

○は平均、バーは値の範囲を示す

着色した部分は年輪幅1.0±0.5mm



(2) 約90年生の林分（高山市朝日町）

イチイは、ヒノキや落葉広葉樹の下層木として、しっかり成育していました。この高齢林は、イチイ人工林の将来像を示すと同時に、施業の方向性も示唆しています。

イチイの胸高直径には、ばらつきがありました。優勢個体は、樹冠長が大きい（≒葉量が多い）ので、成長が維持されます。一方、劣勢個体の樹冠長は小さい（≒葉量が少ない）ですが、イチイは耐陰性が高いので、枯れることなく、ゆっくりと成長できます。時間の経過とともに個体間の優劣が明瞭になった結果、大きさに違いがみられたと考えられます。

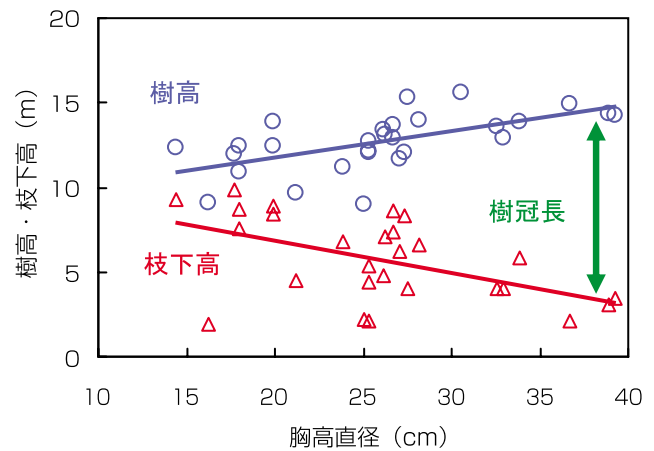
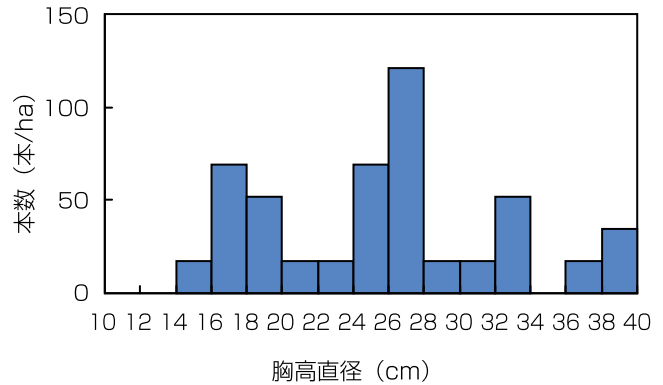
これらのことから、**上層木の有無やその種類を検討することによって、イチイを一位一刀彫に適した形質に誘導できる**可能性がありそうです。

分からないことはたくさんありますが、**イチイを育てる技術とは、必要以上に太くならないよう成長をコントロールする技術**です。これは、通常の育林体系（造林木を早く目的の太さまで育て、太さの揃った材を収穫する）とは違う発想です。

イチイの育林におけるキーワード（長伐期、大きさのばらつき、複層林、他樹種との混交）は、とりもなおさず、育林の難しさを示すものです。しかし、これらのキーワードは、今、人工林に求められている視点でもあります。

一位一刀彫を継承するために

イチイを収穫するまでには、非常に長い年月がかかります。一位一刀彫を継承するためには、利用可能なイチイの天然資源量を調査・把握し、計画的に伐採・利用するとともに、人工林造成に取り組む必要があります。この息の長い計画を確実に実施するには、**県民の皆さんの力をお借りしながら、林業行政と商工行政が連携して、長期視野に基づいた事業を推進していくこと**が求められます。



胸高直径階分布（上）と
胸高直径と樹高・枝下高の関係（下）
樹冠長は、樹高（○）と枝下高（△）の差であり、その値は、
ほぼ葉量に比例する